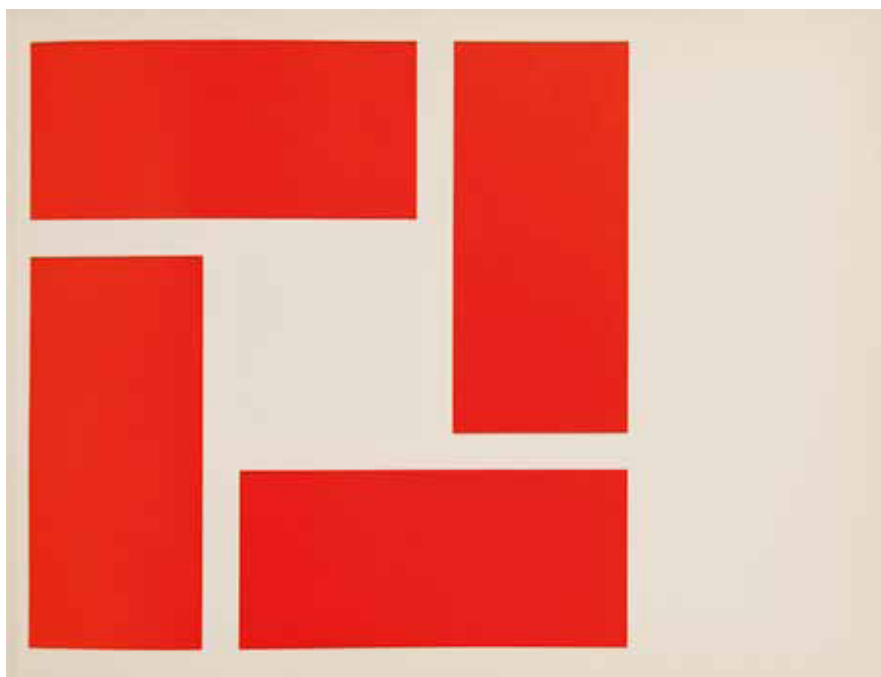


美術



本



美術 × 本 = ?

美術と本の展覧会、ふーむ。 それって、絵本の展覧会？ 写真集？ ひょっとしてマンガの展覧会?! ちょっと変な本とか、おしゃれな本のこと？ 美術の画集が並んでいたりして・・・

たとえば週刊誌には文字や写真が載っています。そこに載っているのは情報です。週刊誌を読む私たちも、その情報を受け取ります。そして読み終わったら、週刊誌はだいたいゴミ箱にポイ！ 週刊誌も本的一种だけれど、そこで大切なのは情報で、読み終わったらその本(週刊誌)は役目を果たして姿を消す。もし捨てずに取っておいたとしても、それはその中味(情報)を捨てたくないから。この時、本の中身(情報) > 本(週刊誌)。

捨てられずに放置されていた週刊誌。あるとき、ふとそれに気づいたら、あなたならどうしますか? 「捨てる。」そうでしょう。でもちょっと捨てるのに忍びない、と思ったあなた。パラパラとページをめくり、古くなって役に立たない情報や、いい感じに古びた紙の手触りやにおい。よく見ると、この表紙のデザイン、ちょっとレトロでいい感じ。ついでに、役に立たなくなった情報も、見方によっては時代を証言する情報のようにも思える。この時、本の中身(情報) = 本(週刊誌)。

ふたたび、捨てられずに放置されていた週刊誌。損傷が進んで、一部は崩壊が始まっている。あなたならどうしますか? 「捨てる。」そうでしょう。もう中味は読めない、捨てなくても、そのうちひとりでに消滅するでしょう。それでも・・・、と思ったあなた。そこにはもう本の痕跡と時間しか残らないですよ。それでも、その本に後ろ髪を引かれてしまうあなた。この時、本の中身(情報) < 本(週刊誌)。

こんな事に気付いてしまった人たちがいた、と思います。そして今もいる、と思います。そんな視点から美術と本の間を眺めて、いろんな作品を紹介するのがこの展覧会です。

1「20世紀初頭の豪華本からアーティストブックまで」

この展覧会は大きく3つのパートに分かれています。まず最初は、ピカソやシャガールなどの巨匠たちによる豪華な挿絵本を中心に、比較的最近のアーティストブックも少し交えて、この100年ほどの「美術」と「本」のかかわりを振り返ります。

マティスの版画の代表作『ジャズ』(1947年刊)。20点組の作品集ですが、ページ番号が振ってあるし、文字のページもある。普段は絵のページを額に入れて展示していますが、これは豪華で大きな本です。本展で展示している徳島県立近代美術館所蔵のピカソ、シャガール、カンディンスキー、マティス、エルンスト、ダリ、ルオーなどの版画も、実は本でもあります。

これらの本／版画は、製本されていません。だからバラバラにして額に入れて飾ることも容易なのですが、そもそもヨーロッパには、仮綴じ、あるいは綴じられていない状態で販売された本を、自分好みに装丁して仕上げるという伝統的な楽しみ(ルリユール)があるそうです。本は情報(中味)があればそれでいい、というものではないようです。

マティスやカンディンスキーは、絵も文も自分でかいていますが、ピカソは詩人マックス・ジャコブやピエール・ルヴェルディの、ダリは詩人ロートレアモンの、シャガールは古代ギリシアの詩人ロンゴスの、ルオーは詩人ボードレールの、といったように、友人などの詩集に寄せた挿し絵も多く見られます。共著というのでしょうか、絵本で言うと文〇〇、絵△△、といった感じです。なるほど、本はコラボレーションするのに適した場なのだ、と思います。

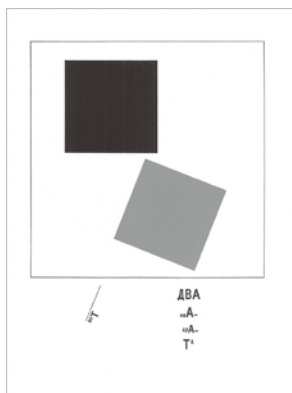
絵描き、彫刻家、版画家、写真家、あるいは詩人、小説家というふうに、ジャンルをわけてレッテルを貼る。自分が何者なのか、ということ周囲に端的に伝えることが必要な場面はたくさんあります。それができないと、正体不明の変人や不審者とみなされて信頼を失ったり、もったいぶって正体を明かさない嫌な人と見られることだってあるかも知れません。でもそんな既存のレッテルをはみ出して突き抜けてゆくことが、表現する人にとっては重要な時もある。そして様々な表現や方向性が交差するコラボレーションがその可能性を開く場所なのだとしたら、コラボに適した「本」も、新しい芸術表現のための前衛的な舞台だといえます。



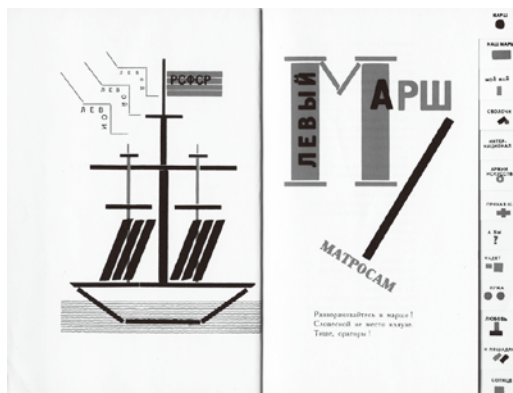
アンリ・マティス 『ジャズ』より 道化師 1947年刊

エル・リツツキーの『声のために』(1923年刊)。詩人マヤコフスキーの詩を音読するための詩集で、これもコラボレーションです。詩の音声は文字と線や記号で視覚化されていて、これは聴覚と視覚のコラボともいえるでしょう。また、右端のインデックスは、目的のページに一気にアクセスできます。コンピューターがお得意のランダムアクセスの先取りです。

同じくリツツキーの『2つの正方形の物語』(1922年刊)、は四角と丸のシンプルな要素で構成されたこども向けの絵本です。でも、黒の四角は旧態依然とした悪しき体制を、赤の四角は新しい秩序を意味していて、その2つの四角が闘い、最後は赤が勝つ。社会的・政治的な思想を明確に主張しています。そして、これらはロシアの前衛、ロシア・アヴァンギャルドの成果です。



エル・リツツキー『2つの正方形の物語』
1922年刊(復刻版1988年)



エル・リツツキー『声のために』 1923年刊(復刻版2000年)

フランスから世界に拡がった前衛的な芸術運動シュルレアリスムは、多くの雑誌を発行していることが特筆されます。『シュルレアリスム革命』(1924-29年刊)、『革命のためのシュルレアリスム』(1930-33年刊)、『VV』(1942-44年)、『シュルレアリスム、さえも』(1956-59年刊)などです。シュルレアリスムといえば、たとえばダリのように現実離れた妄想のような不思議な表現を連想する人も多いでしょう。でもそれは新しい芸術運動であると同時に、社会的・政治的思想とつながった革命運動という側面も持っています。これらの雑誌は機関誌であり、彼らは雑誌／本を、メッセージの伝達手段、媒体(メディア)として、大いに意識していたのです。

また、この両者ほど社会的、政治的な色彩が濃くはありませんが、先端的な造形教育機関としてドイツに設立され、後に前衛的に過ぎるとしてナチス・ドイツにより追放されたバウハウスや、オランダで始まった抽象的で普遍的な様式(スタイル)を追求したデ・ステイルも、それぞれ機関誌を発行しています。時代の先頭をきって走るこれらの運動が盛んに雑誌を発行したのは、社会への自分たちの主張・メッセージの伝達であると同時に、その運動を異端と見なして妨害や迫害を加えてくる勢力への抵抗であり、一種の武器だったのかも知れません。



『シュルレアリスム革命』誌 1924-29年刊

海外でアヴァンギャルド芸術が盛んだった頃、日本は大正から昭和の初めでした。当時の海外の最先端の芸術動向を受容して紹介し、洗練した形で発信していった一人に恩地孝四郎がいます。彼が編集した雑誌『書窓』(1935-38年刊)は、図案、製本、紙など本の構成する要素についての研究成果を発表し、同時にそれを実践するもので、本に関する総合雑誌といえるものです。恩地は宣言します。「本は文明の旗だ」*と。本は生活必需品ではないのかも知れない、でも「本」は文化を推進し、文明の先頭ではためく「旗」なのです。(*『本の美術』1952年誠文堂新光社)

時代の先端をアヴァンギャルドな動きが先導しながら進み、その先頭には「本」があった。このような視点から振り返ると、大きな節目となったのは第二次世界大戦です。それは21世紀の今から数えると、もう70年以上も前のことですが、その戦後、本を表現媒体として捉えたアーティストブックという考え方が登場します。それは文字どおり「芸術家による本」で、少し限定的に考えると「アートワークとしての本」ともいえますが、いずれにしても本の持つ可能性が大いに拡がりました。そして本を媒体とする表現は、今も多様な展開を見せています。しかし多様であることは、同時に何が先端なのかが見えづらくなっていることなのかも知れません。もちろん先端を切り拓くアヴァンギャルドだけが、表現する者の使命や価値観ではないし、むしろそれは、今では時代遅れのアナクロに見えることもあるでしょう。表現する者の意識も多様化し、拡散しています。

それはともかく、本を媒体とする表現を考える時には2つのポイントがあると思います。その1つは「オブジェ性」です。本もひとつの「もの」である。本の物質性に注目した作品です。本はとくに多くの情報をのせることのできる媒体ですから、その情報をひとつひとつ引きはがして、ただの「もの」にしていく、ということを考えるのは、非常に奥が深く、幅が広く、そして煩雑で複雑なアプローチが必要です。それは、ものの存在とは、有ることとは、無いこととは、という哲学的な問いにもつながります。

そして、もう一つのポイントは「時間性」です。そもそも本に最もなじみやすい表現は文学です。そして

文学は、音楽や演劇、映画等と同様に、時間と相性のいいジャンルです。それに対して、絵画や彫刻などの美術は、大抵の場合、それをさわる事ができる物質性や空間性を持っています。これを裏返せば、本には物質性や空間性が乏しく、美術は時間を表すのに苦労する、ということになります。

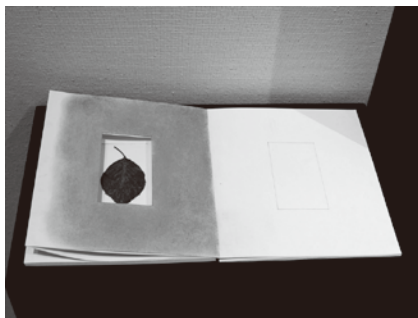


恩地孝四郎 編 『書窓』 1935-38 年刊

現代美術家・大久保英治の〈吉野川一場の刻 6/30・9/29・12/1〉(2012年)は、6月末、9月末、12月始めの3回、それぞれ春と夏、夏と秋、秋と冬の季節の変わり目に徳島を流れる吉野川の河口付近を歩くことで制作されました。この作品を物理的に成立させているのは、歩行中に拾ったものですが、そこであらわそうとしているのは、吉野川という場所とそこに流れる時間です。時間は拾ったものそれ自体に内在しているとも言えますが、大久保はそれらのかたわらに、歩きながら拾った葉っぱを貼ったり、その場所の土をこすりつけた「折り本」をおきました。「折り本」は時間をのせるのが得意なメディア。そこに歩行中に拾われて、その場所から切り離されオブジェ化した葉っぱや土がのる。「時間」と「場所／空間」。「本」と「美術」のそれぞれが得意とする領域がここにクロスします。



大久保英治 〈吉野川一場の刻 6/30・9/29・12/1〉 2012年 ミクストメディア



大久保英治 〈吉野川一場の刻 6/30・9/29・12/1〉の折り本

本の表現を考える時の「オブジェ性」と「時間性」という2つのポイントは、どうやら表裏一体のようです。「本」はものの存在や時間のことを深く考えさせる哲学的な表現媒体なのだと思います。

現代では本というと、まず冊子の形を思い浮かべますが、巻物や折り本もまた日本に古くからある本の形です。時間の流れ方で比較すると、巻物は時間が一直線に流れるのに対して、冊子と折り本はランダムに時間を行き来することができます。また冊子と違って巻物と折り本は、全ての時間、場面を一望することができます。折り本はさらに、折りたたみ方の工夫によって、関係性のない場面や時間を隣り合わせに並べることもできます。これはシュルレアリスムの手法の1つで思いがけないもの同士を出会わせるデペイズマンの手法と共通します。このように折り本は特に自由度が高く、そこにも可能性を感じます。

いがみ ほんこつ

2「徳島出身の木版彫刻師、伊上凡骨の仕事」

さて、大正から昭和初期は、本の装丁に画家や版画家が関わることが多かったといえます。ここで紹介する〈劉生図案画集〉(1921年刊)は、洋画家・岸田劉生が手がけた大正時代の雑誌『白樺』の表紙や、小説家・武者小路実篤らの著書の装幀の図案集です。ここに徳島出身の伊上凡骨が、彫り師(木版彫刻師)として参加しました。これもまた、本を舞台とした美術家や文学者たちによるコラボレーションの一つです。



伊上凡骨 劉生図案画集
(原画：岸田劉生 木版彫刻：伊上凡骨)
1921年刊

3「美術と本の楽しい関係」

ここは3つのコーナーに分かれています。

(1)本の楽しさといえば、やはり絵本の紹介は欠かせません。仕掛け絵本や立体的な絵本、さわって楽しむ絵本などを展示します。今年開館100周年を迎える徳島県立図書館の協力を得ました。

(2)徳島県立近代美術館は、ここ数年にわたって保育所などの幼児たちと対話しながら美術作品を鑑賞する実践を続けています。幼児には難しい美術用語は通じません。試行錯誤しながら鑑賞教材として開発してきた紙芝居や絵本をご紹介します。その題材となったのは、イヴ・クラインやアレクサンダー・コールドーの作品。これらもあわせて展示します。

(3) 個人や有志が自主制作し、内容や体裁などの全てが自由な冊子 ZINE^{ジン}を紹介します。1930年代アメリカの SF ファンによる自主制作マガジン（ファンジン）がルーツといわれる ZINE は、その後 50 年代のビート・ジェネレーションや、60～70 年代のベトナム戦争、公民権運動などを背景にしたヒッピー文化、80～90 年代のロックやパンク音楽、スケートボード等のストリート・カルチャーなどと連動して、反体制的で自由な発想のものが個人発信的に次々と生みだされました。70 年代以降のコピー機の普及はその拡がりに勢いをつけたと言われます。また、日本でも同人誌やミニコミ誌の動きと一部重なりながら、アニメやサブカルチャー、ポエム、写真集、タウン情報など多岐にわたる内容で密かに拡がってきました。そして近年は、インターネットによる各種の SNS に見られる個人発信が大流行するなかで、その紙媒体としてのあり方が注目されているようです。

先に述べてきたように、「本」が異なったジャンルのコラボを呼び込んで、従来の枠をはみ出る自由な表現を開く場であり、時代の先端を走る前衛のメッセージの伝達媒体であり、時には体制への抵抗や反逆の武器であり、そして文明の先頭にはためく「旗」であるならば、そのエッセンスは、これら ZINE のなかに生きているのかも知れません。

今回は徳島県内の若者を中心とする人々の協力を得て、現在進行中の様々な ZINE をご覧いただきます。また、2006 年の「ZINE Library」展(No.12 Gallery 東京渋谷区)をスイスのニープス・ブックスと合同で企画した、写真家・^{ひらの たろ}平野太呂氏の ZINE コレクションも特別出品されます。

私も何かつくりたくなってきた。そんなあなたには、ロビーに設けたミニサイズの冊子の制作体験が、手軽にできるワークスペース(作業場)がおすすめです。ほかにもワークショップやスペシャルトークなども用意しています。美術 × 本＝「あなたの答え」を探してみてください。

(徳島県立近代美術館 友井伸一)



写真家・平野太呂氏の ZINE コレクション



TARO HIRANO PHOTOGRAPHS, "ABANDONED POOLS" 2004

「音楽と絵でつくるおはなしの世界」※要申込

2017年8月27日(日) 13時30分-15時30分

講師：高木夏奈子(植草学園大学准教授) 美術作品と音楽から絵とおはなしをつくるワークショップ。

展覧会場/対象：小学生以下のこどもと保護者(小学生はこどものみも可)

定員20名(保護者含)/無料

「銅版画プレス機でオリジナルのミニ本をつくろう」※要申込

2017年9月3日(日) 10時-15時30分

講師：近代美術館スタッフ

ドライポイント(樹脂版)でオリジナルの小さな冊子(絵本、詩集、メモ帳・・・)を作る体験。

3階アトリエ/対象：一般(高校生以上)

定員20名/無料

※申込方法：電話又はFAXで下記まで。先着順。定員になり次第締切
徳島県立近代美術館「美術 × 本展ワークショップ」担当宛 電話：088-668-1088 FAX：088-668-7198
FAXの場合は、「ワークショップ名」「名前」「電話番号」「FAX番号」「住所」を必ず明記。

ワークスペース「ミニ本をつくろう」

紙を折りたたんだりジャバラに折って、手軽にオリジナルの本をセルフで作ることのできるスペース。

開催期間中、随時ご利用できます。

2階美術館ロビー/観覧料が必要。一部に無料スペースもあり。

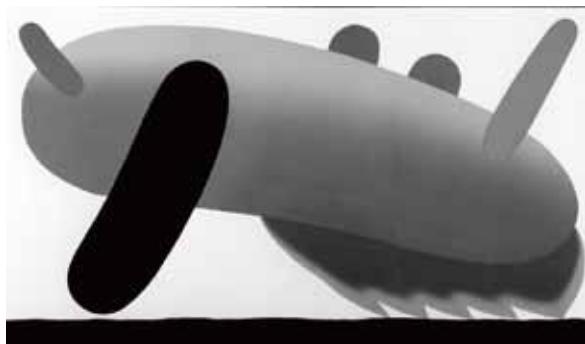
「折りたたみ絵本をつくろう」

2017年8月29日(火)、30日(水) いずれも13時30分-15時30分

2階美術館ロビーのワークスペースにスタッフが常駐。折りたたみ絵本づくりをお手伝いします。

2階美術館ロビー/申込不要・随時受付/無料

所要時間の目安は約30分



元永定正 〈あいんしゅたいん〉 1986年 シルクスクリーン 紙

「美術館でおはなし会」

2017年8月29日(火) 10時30分～(20分程度)

読み手：県立図書館の司書さんたち

元永定正の『ころころ』『もこもこ』『たのしい絵本』を用意しています。

2階美術館ロビー／対象：幼児から小学3年生程度

定員：子ども30名(保護者同伴可)／申込不要(先着順)／無料。

スペシャルトーク「さわって読む本のたのしさ」

2017年9月16日(土) 14時～15時

講師：半田こづえ(明治学院大学非常勤講師) 視覚障がい者の立場から美術と本を語ります。

観覧会場／申込不要／観覧券が必要。

スペシャルトーク「^{ジン}ZINEの魅力：^{ジン}ZINE民の^{ジン}ZINE民による^{ジン}ZINE民のための^{ジン}ZINE講座」

2017年9月24日(日) 14時～15時

講師：永田広志(アーティスト・デザイナー) 自主制作の自由な冊子ZINEの魅力を制作体験も交えて紹介。

観覧会場／申込不要／観覧券が必要。

学芸員のポイント解説『劉生図案画集』と徳島の木版彫刻師・伊上凡骨^{いがみ ほんこつ}

2017年9月2日(土) 14時～14時20分

観覧会場／申込不要／観覧券が必要。

学芸員の見どころ解説

2017年9月18日(月・祝)、10月9日(月・祝) いずれも14時～15時

観覧会場／申込不要／無料

子ども鑑賞クラブ「本の楽しさ」

2017年9月9日[土]14時～14時45分

2階ロビーに集合／対象：小学生／申込不要／無料 (保護者同伴可。観覧券が必要。)



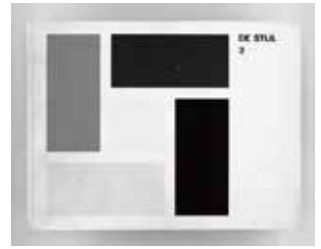
イヴ・クライン 〈空気の建築；ANT 119〉
1961年 顔料、合成樹脂 紙、キャンパス



『デ・ステイル』誌より
1917-32年刊(復刻版1968年)



アルベール・グレース 『キュビズムについて』
1947年(初版1912年)



『デ・ステイル』誌より



『デ・ステイル』誌より



『デ・ステイル』誌より



『バウハウス』誌 1926-31年刊(復刻版1977年)



『デ・ステイル』誌より

1「20世紀初頭の豪華本からアーティストブックまで」

- パブロ・ピカソ 『聖マトレル』 1911 年刊
パブロ・ピカソ 『エルサレムの攻略』 1914 年刊
アレバール・グレーズ 『キュビズムについて』 1947 年(初版 1912 年)
ヴァシリー・カンディンスキー 『響き』 1913 年刊
エル・リシツキー『2つの正方形の物語』 1922 年刊(復刻版 1988 年)
エル・リシツキー『声のために』 1923 年刊(復刻版 2000 年)
マックス・エルンスト 『博物誌』 1926 年刊
サルバドール・ダリ 『マルドロールの歌』 1974 年刊(初版 1934 年)
『シュルレアリスム革命』誌 1924-29 年刊
『革命のためのシュルレアリスム』誌 1930-33 年刊
『デ・ステイル』誌 1917-32 年刊(復刻版 1968 年)
『パウハウス』誌 1926-31 年刊(復刻版 1977 年)
ヴィチェスラフ・ネズヴァル 『Abeceada』 1926 年刊(復刻版 1993 年)
マルセル・デュシャン『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも(グリーン・ボックス)』1934 年
マルセル・デュシャン 『恋人たち』 1967 年
マルセル・デュシャン、アルトゥロ・シュヴァルツ著 『大ガラスと関連作品』(編) 1967 年刊
『フィースト・ペーパーズ・オブ・シュルレアリスム』 装丁：マルセル・デュシャン 1942 年刊
『VVV』誌 1942-44 年刊
『シュルレアリスム・さえも』誌 1956-59 年刊
アンリ・マティス『ジャズ』 1947 年刊
ジャン・デュビュッフエ 『壁』 1950 年刊
マルク・シャガール 『ダフニスとクロエ』 1961 年刊
ジョルジュ・ルオー 『悪の華』のために版刻された 14 図』 1966 年刊
パブロ・ピカソ 『流砂』 1966 年刊
ベン・シャーン 『リルケ『マルテの手記』より：一行の詩のために』 1968 年刊
ジム・ダイン 『ドリアン・グレイの肖像』 1968 年刊
ピエール・アレシンスキー 『モニュメント・タバコ』 1978 年刊
ホアン・ミロ、瀧口修造著 『ミロの星とともに』 1978 年刊
ルーチョ・フォンタナ 『アントナン・アルトーの肖像』 1968 年
クリスト他 『S.M.S.』 1968 年刊
ソル・ルウィット 『オート・ピオグラフィー』 1980 年刊
恩地孝四郎 編 『書窓』 1935-38 年刊
駒井哲郎 『マルドロオルの歌』 1952 年刊
駒井哲郎 『詩畫集 蟻のいる顔』 1973 年刊
池田満寿夫 『屋根裏の散歩者』 1959 年刊
池田満寿夫 『かぐやひめ』 1976 年刊
大久保英治 〈吉野川一場の刻 6/30・9/29・12/1〉 2012 年 ミクストメディア

2「徳島出身の木版彫刻師、伊上凡骨の仕事」

伊上凡骨 劉生図案画集(原画：岸田劉生 木版彫刻：伊上凡骨) 1921 年刊

3「美術と本の楽しい関係」

元永定正 〈あいんしゅたいん〉 1986 年 シルクスクリーン 紙
イヴ・クライン 〈空気の建築；ANT 119〉 1961 年 顔料、合成樹脂 紙、キャンパス
アレクサンダー・コールドー 〈角ばった肩の生きもの〉 1974 年 彩色メタル
写真家・平野太呂氏の ZINE コレクション
TARO HIRANO PHOTOGRAPHS. "ABANDONED POOLS" 2004 ほか

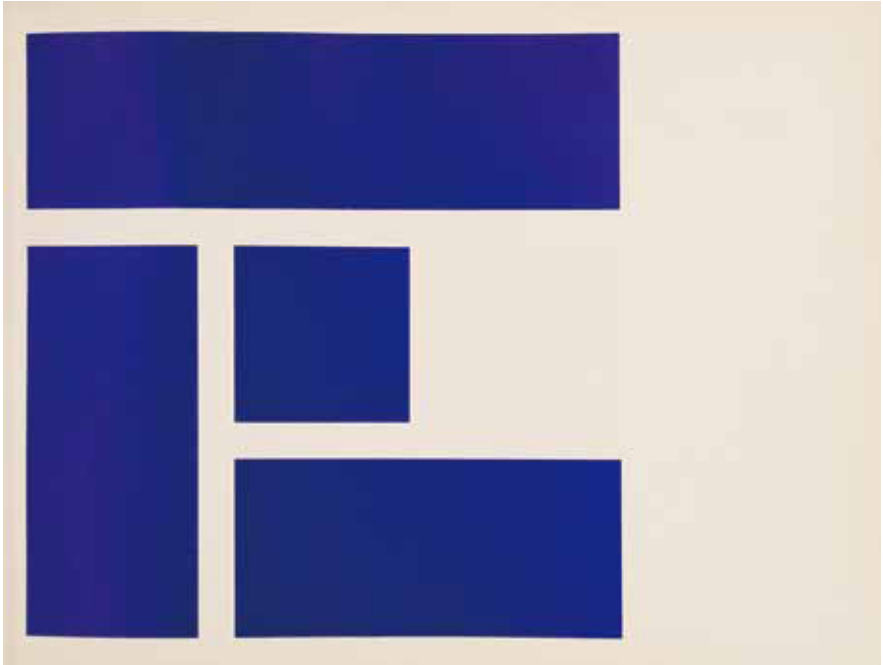
*平野太呂氏の ZINE コレクション以外は徳島県立近代美術館

美術 × 本=楽しさと多様性 展 // 所蔵作品展 徳島のコレクション 2017 年度第 2 期 // 祝 県立図書館 100 周年 // Art × Books=Fun and Diversity // 2017 年 8 月 26 日(土) - 10 月 9 日(月・祝) // 徳島県立近代美術館 // 開館時間: 午前 9 時 30 分 - 午後 5 時 // 休館日: 月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日) * 9 月 18 日(月・祝)、10 月 9 日(月・祝)は開館 // 観覧料: 一般 200 [160] 円 / 高・大生 100[80] 円 / 小・中生 50[40] 円 []内は 20 名以上の団体料金。

*夏休み期間中(8月26日 - 31日)は、どなたも入場無料です*高齢者(65歳以上)、障害者と介助者 1 名は無料です。
*小・中・高生は土・日・祝日・振替休日は無料です。*大学生・一般は、祝日・振替休日は無料です*通常の所蔵作品展(展示室 1,2、屋外展示場)もあわせてご覧いただけます。主催: 徳島県立近代美術館

助成: 一般財団法人 地域創造 // 徳島県立近代美術館 // 770-8070 徳島市八万町向寺山 文化の森総合公園 // tel:088-668-1088

fax:088-668-7198 // art@mt.tokushima-ec.ed.jp // www.art.tokushima-ec.ed.jp/bihon // 美術 × 本=楽しさと多様性 展 解説冊子 // 2017 年 8 月発行 // 編集・執筆: 徳島県立近代美術館(友井伸一) // デザイン: mind inc. // 印刷: 星印刷株式会社 // 発行: 徳島県立近代美術館 © 2017 The Tokushima Modern Art Museum



所蔵作品展 徳島のコレクション 2017年度第2期

祝 県立図書館100周年

美術 × 本 =

楽しさと多様性

展

Art × **Books** = Fun and Diversity

AUG.26.2017 - OCT.9.2017

The Tokushima Modern Art Museum



www.art.tokushima-ec.ed.jp/bihon